

# 放浪老人 最後の迷い

ならは よしき  
榎葉由希



●受賞のことは  
応募した事さえ忘れかけていた旅の最中。立ち寄った小屋よりの出立が台風で遅れた為、に受賞の報を得る事が出来た幸運。今では背後霊となり、見護ってくれているのであろう父母、親友、巡り遭った競走馬たちの優しさだと感じる。勿論、拙文を推してくれた方々…その全てに「ありがとう」の言葉を。もうひとり特別な存在…あの高野山に住む生真和尚の母親であるM子さんに…「やったよ！ おかちゃん」バイキンより感謝をこめて。

●プロフィール  
1948年8月12日生、佐賀県唐津市出身。集団就職の後、19歳で漫画単行本デビュー。以降、幾つかのペンネームで約100タイトルの作品を発表。母を看取った後、念願であった放浪の旅に。現在も尚、無責任放浪中。

五木寛之氏の、四国遍路に関するエッセイの中に、こんな下りがある。―四国へ旅立つ人は、八十八カ所の寺々から呼ばれているのだと考えてみたらどうだろう。

その四国霊場八十八カ寺・第三十三番札所「雪隠寺」を打ち終えた巡礼の多くは、そのまま278号線を次の札所へと歩いて行く。

しかし巡礼、所謂お遍路さんの中で、「雪隠寺」から二本目の角を右折して暫く歩いた所に競馬場がある事を知る者は少ない。

高知競馬場。かつて中央競馬で活躍した天才騎手の名を冠した記念レースが催される地方競馬場である。雪隠寺への渡船乗り場近くの種崎千松公園。今ではその公園をフランチャイズとしている男は、巡り来る度に競馬場への角で歩みを停める。

「……」僅かにその方向を見やり、そのまま生活用具満載の自転車を押して、国道55号線へと歩いて行く。自分は今、競馬場から呼ばれてはいないのだ。過る吐息に思いが混じる。無収入のホームレスとなった男には馬券はおろか入場券を購入する余裕さえないのだから。

十数年前迄、男の人生は競馬と共にあった。いつでも競馬に携わる側ではなく、観戦し馬券を購入する側の人間として。

かつての天才騎手と同一年の生まれである男が生活の糧を得る為に選んだのは漫画を描く事であった。

その道を選ぶより少し若い十六歳の秋。集団就職で住み込んだ名古屋の鉄工所。その工員時代。一年後輩の兄に連れられ行ったのは、市の郊外にある小さな競馬場。

その頃の風潮として、ケイバ、ポート、ケイリン、オート等は引つ括めて「バクチ」であり放蕩者或いは裏社会に生きる輩として、まっとうな社会生活を営んでいる人間達から蔑みの目で見られていたように思う。因みに後輩の兄は十八歳の所謂チンピラヤクザであった。

気の進まぬ賭場参りであったが、男は目の当たりにした競走馬の姿に、一瞬にして心を奪われてしまった。幼い頃、男の家では山羊を飼っていたし、近隣の農家には牛や馬がいたから、そう珍しいワケでもない。

ヒカルイマイ。二着ハーバーローヤル。連勝複式⑤①⑤…とあった。この時、男が興味を持ったのは配当金額ではなく、優勝馬の血統欄に記されたサラ系の文字。以降男は、競走馬の血統調べへのめり込んでいく。遺伝子の作用、配合の妙を知り、自分でも配合を考えるようになった。そして辿り着いた結論は、父馬は当然であるが、より重要なのは母系であるという当たり前の図式。

馬券購入の折には、それが結構役に立ち、年間トータルでマイナスという事は殆どなく、時には本業よりも収入が多いという年さえあったりした。しかし男は馬券で儲けるといふ事よりも、馬たちの走る姿を見る方が好きであった。競馬場通いも馬券購入よりは、写真撮りが目的であったように思う。強い馬はより美しく、美しい馬はより強い。仕事場はそんな馬たちの写真や競馬に関する書籍で埋まっていた。

担当編集者と打ち合わせをしても、話は自然競馬へと移行していく。創り話はワリと簡単に結論づけられるが、レースの展開、幾つものストーリーはそう簡単ではない。漫画描きとしての晩年、男は馬券雑誌に予想エッセイなるものを連載した事がある。月刊誌であったから、調教や気配からの予想というワケにはいれない。血統からのみの「穴馬」探しであったが、そこそこ適中させ、幾人かのファンもついたりした。

男はまた様々な場面も目撃してきた。柵から観客がこぼれ落ちた「弥生賞」、あのテレビ画像の左端にカメラを持った男の姿がある筈。テレビの放送時間枠を大幅に越えてしまった「中央競馬招待競走」で羽ばたいたゴールドイーグル。イットー。キタノカチドキ。ヤマブキオー。タニノチカラ…。より好きになった馬

のだが、その頃接していたのは農耕馬であり馬車馬である。

初めて見るアラブ種、サラブレッド種の姿は勿論であったが何より感動したのは、その瞳の美しさであった。農耕馬や牛たちの哀しげな瞳とはまた違った美しさ…そして強さ。

競走馬の瞳には故郷の草原が映し出されている。後年、男は誰かからそんな言葉を聞いた事がある。それ以前にも競走馬の姿は見ていた。小学生の頃、ヤマモモの季節。ただし生ではなくテレビの映像で。その頃、貧乏な男の家は、家を半分仕切り他人に貸していた。その呉服店の店先にテレビがあった。

たまたま見た、その円っこいブラウン管の緑っぽい画面いっぱいには沢山の馬が走っていた。馬群の先頭を走る馬の額には鮮やかな星が流れていたのを今も記憶している。

それが競馬というものであり、そのレースが「日本ダービー」という競馬の祭典で、あの時の馬が超特急コダマという名であると知ったのは、男が東京で暮らして、競馬場へ通うようになってからの事である。

たちの名を挙げればきりはない。青龍寺から第三十七番札所へと至る通称「地獄の七子峠」にへたり込む疲れた体を砂埃混じりの風が吹き過ぎる。その風の中に今は原子に還ってしまったであろう母を感じる時がある。父：祖父母そして友。勿論生きる力を与えてくれた馬たち。みんなく自分を含み護ってくれていると感じる時がある。

ホームレスの放浪者となってしまった男の旅が終るのも、そう遠い事ではないであろう。日本一周に向かった時のように道端に倒れてしまいかも知れない。三年前のあの時は何とか自力で回復する事が出来たが、体力の落ちた今、そうはいかないかも知れない。しかし、それでも本望であると男は思う。自ら選んで歩いて来た道なのだから…と。

人間の伴侶に巡り遭う事は出来なかったが、概ね幸せな人生ではあったと思う。一方的な片想いでしかなかったが、素晴らしい伴侶たちと共に人生の大半を越す事が出来たのだから。夜、朽ちたガソリンスタンドの片隅に張ったテントに横になり男は思う。確実に呼ばれる場所の事。そこで男の体は分解し塵になって消える…。

…が、その前に呼ばれる場所。がもうひとつあって欲しいと願う。そこは緑なす草原であり、競走馬たちの故郷。薫風の中を懐しい馬たちが駆け回っている。

その中でも一番逢いたい馬。馬群の先頭を切って走るの…ヤマゼントップであって欲しい…あ、彼は砂の怪物であったか…と、男はここで迷う。別の馬にするか、それとも舞台を変えるか…と。

トイレに行った時、個室の壁に落書きがあるのを見た、今年のダービーは⑤①⑤と。また単・複・連のみの時代である。何故かこの年のダービーを男は生で観戦する事が出来ず、結果を知ったのは翌日のスポーツ紙で、優勝は

二〇一七・七・二八  
旅の途中にて。